縁なく選んだ茅葺き職人の道、今は不燃化の特許申請中

わが家のミカタ

「エコ建材」茅の復権図る

住んでみんか 直して古民家 ③

この字何の字、気になる字。雑誌で見つけた「茅葺き職人」の募集広告を「メブキ？」と読んだ大学生は、飛び込んだ職人の世界で確信します。続ければこそ道は開け、花咲くことを。今は全国の屋根を飛び移るベテランとなった彼が目指すのは、エコ建材としても有用な茅葺きの復権。これぞ大義。日焼けした腕は、今日もせっせと茅を葺いています。（神田剛）

山深い京都府南丹市の美山町には、岐阜の白川村、福島の下郷町と共に、茅葺き屋根の民家が多く残る。

西尾晴夫さん(37)が、ここで茅葺き職人に弟子入りしたのは94年のこと。

大学は哲学科、打ち込んだのはサークルのバスケ。しかも神戸の実家はコンクリートのヘーベルハウス。

伝統建築には無縁の西尾さんがこの道に進んだきっかけは、雑誌で目にした職人の募集だ。「何となく手に職をつけたかったし、好きな京都に住めたから」

人生の岐路を決めるきっかけなんて、意外とそんなものなのかもしれない。

最初の半年は、資材運びや掃除ばかり。後悔し始めたある日、親方から茅を屋根に並べるよう言われた。

まだ何も教わっていない。やり方を尋ねた西尾さんに親方は言った。「今まで何を見てたんや」

はたと気づいた。技は見て盗むもの。段取りを考えるのは自分の頭。動かすのは自分の手ということを。以来、休憩も惜しんで親方の動きを目に焼き付けた。

美山ではほとんどの家の葺き替えにかかわり、5年前に独立。一般の民家から文化財まで現場を踏み、イギリスの茅葺き職人の元にステイしたこともある。

茅葺き屋根は、雨粒を茅を伝わせて軒先へ導き、そこから下へ落とすもの。葺き替えでは、長さの異なる茅をたたいてなじませ、竹の棒で押さえて縄で力いっぱい締める。ころした作業は、かつては集落の住民が、農閑期に互いに手伝うことで支えられていた。

今はそれを数人の職人でこなす。屋根の上は、夏は暑くてたまらない。冬は寒くてたまらない。だが、西尾さんは茅葺きの将来を確信している。「生産段階で二酸化炭素を出さない屋根材はこれしかないんです」

屋根に葺くのはヨシでもススキでも大丈夫。昔は収穫後の麦ワラを葺く農家も多かった。さらに補修は、北側など傷んだ面だけでも可能。古い茅は肥料にも使える。エコなんて言葉ができる前からこうだった。

今の現場は兵庫県市川町の山里の民家だ。長年空き家だったが、所有する岸上巌さん(61)が会社を退職したのを機に、茅葺き屋根の葺き替えを決めた。

岸上さんは最初、大手不動産会社にリフォームの見積もりを頼んだ。だが、葺き替えだけで1300万円と、新築みたいな価格にびっくりさん。

そこで西尾さんに相談すると、半額ほどと聞いて二度びっくり。

「茅はないはず。職人はいないはず。予算も足りないはず」。世間に根強い三つの思い込みが、茅葺きを減らしている原因だと西尾さんは言う。「実際は、そんなことないんですけど」

気になるのは、上からトタンをかぶせた茅葺き屋根だ。屋内が暑くなる上、トタンが劣化して雨漏りすると家自体を傷めてしまう。

茅葺き屋根が火に弱いことも、トタン化が各地で進む一因となってきた。薬に漬けて耐火処理した茅を使う手もあるが、これだと屋根を新たに葺かなければならず、費用もかかる。

そこで西尾さんが考えたのは、自ら考案した不燃性のネットを茅葺き屋根にかぶせる方法だ。商品化はまだだが、ストッキングのように目立たず、既存の屋根にもすぐ使えるという。

今は不燃ネットの特許を申請中。さらに建材としての耐火性が認められれば、茅葺き屋根の家が新築しやすくなると期待する。

「茅の世界が少しでも変われば、ボクがいる意味もあると思うんです」

老成した言葉も、日焼けし骨張った顔が発すると説得力がある。それはひとつの仕事を続けることで「身吹い」た、職人としての自負心のせいかもしれない。

雨粒が軒先へと伝うよう、茅の流れを整える西尾晴夫さん。現場の民家に泊まり込み、雨が降るまで休みはない＝兵庫県市川町、荒元忠彦撮影

西尾さんが活動拠点とする美山町。茅葺きを見に訪れる人も多い＝京都府南丹市、神田写す

ご感想は、ファクス03・5540・7354 メール mikaya@sbhi.com